

アメリカ フィンドレー大学

春季アニマルハンドリングプログラム活動報告書

(2018年3月10日～30日)

獣医学類五年 岡田実和

私は今まで海外には旅行しか経験がなく、勉学を目的として留学は初めてだった。以前から漠然と海外で勉強をしたい、仕事をしたいと思っていたが将来自分がどんな環境にいたいのか具体的なビジョンが決まらず、そんな時にこのプログラムの存在を知り英語だけでなく海外の獣医療、また普段触れる機会の少ない馬について学べると思い参加した。

実際に行ってみて、勉強だけでなくアメリカという国の文化や現地の人々との交流など、その場でしか経験できないことも多く、私はとても満足だったがもっと早くこのプログラムに参加していればよかったという後悔もある。

今回の留学を経験して、待っているだけでなく自分から行動しなければ何も得られないということを私は痛感した。せっかく自由な時間が多く、挑戦や失敗が許される学生の間なのだから、このプログラムの参加を迷っている方は是非参加してほしい。

その時、私の活動報告書が参考になれば幸いである。

【平日の活動】

平日の朝は早い。5時半頃に起床して自分達で朝食を作り、10分程歩いて6時半のバスに乗る。バスで20分程離れた Western Barn に到着すると、そこでフィンドレー大学の馬学科の学生と一緒に馬の世話をすることになる。

まずここで驚くのが、学生が自分の馬を持っていることだ。自分で世話をし、調教し乗馬することで馬の生態や安全な取り扱い方、病気や治療法まで学ぶ。基本的に餌や水やりなどが終わると馬学科の学生は自分の馬に乗る。私達はそれを見学しているが、私の乗馬経験は2回しかなくそれもちょうと調教され人の言うことをよく聞く馬だったため、言うことを聞かない馬を調教させる学生や先生の姿はとても新鮮だった。乗る前に馬を疲れさせるため、円を描くように走らせる。疲れた馬は言うことを聞きやすくなるからだ。私も何度かやらせてもらったが、中々に難しく、大変だった。

週に1回馬に乗せてもらうこともあったし、学生達の乗馬の試験を見せてもらうこともあった。またマネージャーの Linda と共に馬の種類や色の違い、薬の投与方法なども教えてもらった。



➤ 馬に頭絡をかける。



馬学科の学生の乗馬風景。



➤ 初日のバディ・Alan と記念撮影。



マネージャーの Linda と全員で記念撮影。

獣医師が治療や手術を見せてくれる日もあった。馬で一番注意しなければならないのは、やはり脚の病気だ。歩き方を見て痛がってる脚はどれか、炎症を起こしていないか、蹄は正常かどうか判断する必要がある。

もう一つ重要なのは妊娠診断だ。馬の世界において優秀な血筋というのはその馬の運命を左右する。直腸に手を入れエコーで胎仔を確認するが、正直私には説明されないとどれが胎仔なのか分からなかった。中には人工授精がうまくいかず胎仔が育っていない馬もいた。



➤ 直腸検査を行う先生。



去勢手術で使った器具。



➤ 歯を磨くために固定された馬。

10時になるとバスに乗り、キャンパスに戻って昼食をとる。基本的に自由だが、私はよく Henderson という食堂でお昼ご飯を食べていた。Henderson はビュッフェ式で、好きなものを好きなだけ食べられる。サラダやスープ、自分で具を選んで作ってもらうサンドイッチやハンバーガー、ポテトなど多種多様なメニューが並びそのどれもが美味しかった。

また去年建てられたという施設の中ではメキシコ料理や中華、日本食など買って持ち帰り食べられるようなコーナーもあった。勿論学外に出て外食することも可能なので、食は本当に楽しむことができたと思う。



➤ Henderson の外観。



Henderson でとった昼食。

午後はバスに乗り Animal Science と呼ばれる施設に向かう。そこでは Dr.Kerns と彼のクラスの学生と一緒に仔豚の去勢、仔山羊や仔牛の除角など主に外科手術を行った。向こうの学生が一人か二人、私達のグループについて指導してくれるが皆明るく、とても優しい。英語が分からず戸惑う私達を見て、身振り手振りや簡単な英語に直して説明してくれた。

私は一度授業で仔牛の去勢と除角の実習を経験していたためなんとなくイメージはついていたが、やらせてもらって実際のやり方や消毒の方法など、あらゆる点で違いを知りとても刺激になった。



➤ Dr.Kerns の授業風景。



仔牛へ抗生物質を注射。

一番強烈なのは仔豚だった。見た目は愛くるしいのだが恐らく家畜の中で臭いがトップクラスできつい。また彼らは耳をつんざくような悲鳴を上げる。注射をする時、去勢をする時、普通に抱いている時でもずっと鳴き叫ぶのでフィンドレー大学の学生たちもできれば遠慮したい授業のようだった。



➤ Animal Science にいた仔豚達。

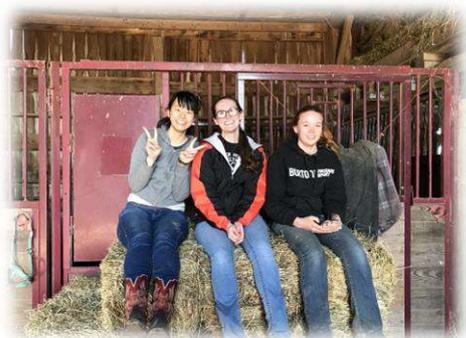


仔羊へ鎮痛剤の投与。

15時に実習が終わり、再びキャンパスに戻る。午後に何も予定が入っていなければそれで一日は終わりだ。私達は障害を持つ人たちへのホースセラピーを行っている Challenged Champions、傷病馬の保護を行う Wyandot Equine Rescue Center、保護された犬猫の譲渡施設である Humane Society、またラブラドルのブリーダー施設などを見学した。

その内のいくつかはフィンドレー大学の学生がボランティアやアルバイトをしている施設で、動物や福祉に対する意識の高さが伺えた。

特に動物愛護の面に関しては、日本も殺処分ゼロを掲げているがアメリカはやはり進んでいると感じた。Humane Society では、ケージに入れるだけでなく実際の家のリビングのような空間を作りそこで犬や猫を人に慣れさせるらしい。アメリカに来る丁度何日前、私は日本の動物愛護センターを見る機会があったため、そういった工夫がなされていることに驚いた。



➤ Equine rescue の学生達と。



馬の削蹄。

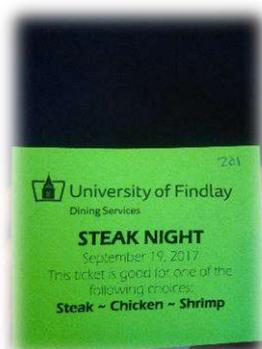
予定が入っていない日は体を休めることもあったし、キャンパス内を散歩することもあった。キャンパス内の敷地は広大で緑豊かだった。酪農学園大学では珍しいリスも1日に何回も見ることができる。私はキャンパスにあったスポーツジムに興味があったので学生のStephanieに案内してもらい、クライミングとビリヤード、ピンポンを体験した。酪農学園大学のトレーニングセンターと比べるとフィンドレー大学のスポーツジムは広く、多くのマシンが設置され施設も素晴らしかった。クライミングは日本にいる間、何度か経験があったので初心者コースくらいなら簡単にクリアできるだろうと思っていたがその考えは大いに甘かった。次の日は全身筋肉痛になったが頂上まで到達できた時の達成感は日本でもアメリカでも変わらず得ることができた。



▶ ジムで挑戦したクライミング。

ジムを案内してくれた Stephanie。

夜はフィンドレー大学の学生達と交流を深め、一緒に夕食をとる日があった。以前日本に来たことがある学生達と今年の5月に酪農学園大学に来る予定の学生達に私達は夕食会で日本食を振舞うことになり、お好み焼きと豚汁をご馳走した。箸の使い方を教えたり、日本食について説明したり、私達の中で丁度誕生日に近い子がいたので祝ってもらったり、楽しい夜を過ごした。また Henderson で行われたステーキナイトというイベントでステーキを食べることもあった。



▶ 皆で作ったお好み焼き。 ステーキナイトで貰ったチケットと実際に食べたステーキ。

【Friday Night】

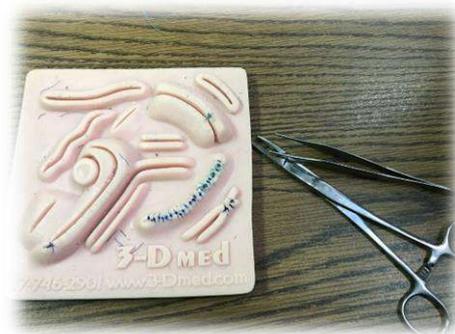
Friday Night はこの短期プログラムのメインと言っていいだろう。金曜日の午後5時頃に Animal science に集まり、Dr.Kerns と彼の学生と共にピザパーティを行い、食べ終わると深夜2～3時まで猫の避妊、去勢手術や馬の採血などを行うイベントだ。私達はイースターの休暇と被さり2回しかできなかつたが、とても楽しかった。

まず巨大なピザが出されて、皆でそれを食べる。正直この時点で満足だが本番はそれからだ。避妊手術の縫合の練習用パッドと器具、糸を渡されてひたすらに練習する。私は一度授業でやったことがあったので思い出しながら出来たが、初めてやると少し戸惑うかもしれない。練習が終わるといよいよ猫を麻酔にかける。持ち込まれた猫もいれば、野生の猫もいる。飼い猫はそこまで恐ろしくないが野生は怖い。可愛いからといって安易に手を出せば大怪我の元である。麻酔をかけた猫を手術台に乗せ、術者はマスクと帽子、グローブをつけて消毒する。腹部を切開して子宮を取り出すのだが、私が担当した猫は妊娠中で5匹の胎仔がいた。術後に胎仔を取り出して見ることもできたので、貴重な体験だったと思う。

2回目の Friday Night では Western Barn にいる馬の全頭採血が行われた。血を調べることで病気を持っていないか調べるためだ。馬は犬猫に比べると血管が太く、ペアの学生が優しく教えてくれたのでやりやすかった。このイベントは体力勝負だったといえる。



➤ 麻酔をかけられた猫。



縫合の練習器具。



➤ 猫の避妊手術。



馬の頸静脈採血。

【休日の活動】

土日は2回あった。その内の1回はフィンドレー大学の学生の家でホームステイをさせてもらい、私はフィンドレー大学のあるオハイオ州から車で5時間の距離に位置するウェストバージニア州に住む Cassie の家に泊まった。Cassie は去年酪農学園大学に来たことがあり、私の拙い英語に合わせてゆっくり話してくれた上にお互いうさぎが好きという共通点があったので緊張や不安はほとんどなかった。途中で彼女のお母さんと合流し、一緒にショッピングモールへと向かい昼食をとった。お母さんも Cassie と同様にゆっくり聞き取りやすい英語で話してくれたので、幸運にも会話に困ることはなかった。

その後 Cassie は彼女の叔母さんが経営している農家を案内してくれた。そこには産まれたばかりの仔ロバや妊娠中の羊、野生の馬など日本ではまず見る機会が少ないであろう動物が多くいた。中でも一番驚いたのは、うさぎ小屋だ。そこには100羽のうさぎがいた。聞けば Rabbit show に出すうさぎらしい。確かにふっくらとした可愛らしいうさぎや毛並みの良い仔うさぎもいて、個人的に一番興奮したかもしれない。



➤ 途中で寄ったアイスクリーム店。



Cassie の叔母さんの農家で。

Cassie の家は丁度イースターが近いこともあって色々な飾りつけがしてあった。彼女のお父さんとお母さん、お兄さんとその友人と一緒に夕食をとり、色々な会話をした。皆優しく、私のたどたどしい英語にも耳を傾け笑ってくれた。お父さんのライフルを見せてもらったり Cassie と一緒にイースターエッグも作ったりと、充実したホームステイを経験することができたと思う。



➤ Cassie と作ったイースターエッグ。



Cassie が飼っている兄弟のビーグル。

【生活について】

私達は6人でキャンパス内にあるゲストハウスに滞在させてもらった。2人部屋が3つあり、ベッドやテーブル、ソファなどの家具や電子レンジ、洗濯機、冷蔵庫などの電化製品は揃っていた。

しかし問題は多くあった。日本と違いアメリカはトイレとバスルームが分かれていない。更にシャワーを浴びる時に連続で入ると温水が出なくなるため、時間を開けて入る必要があった。平日は時間に余裕があるためそこまで気にならないが、Friday Nightのある日は深夜に帰ってから入る人もいたので辛かった。

また人数が多いためトイレトーパーの消費が早く、わざわざ大学内にあるトイレまで徒歩で行く時もあった。事件が起きたのは午後のアクティビティから帰る途中にトイレトーパーが尽きていることに気づき、フィンドレー大学でお世話になっている先生のオフィスに貰いに行こうとした時だった。もうすっかり暗くなっている時間だったためオフィスは無人で、どうしようと途方に暮れていた時にキャンパス内を警備しているガードマンが話しかけてきたのだ。無人のオフィスの前でうろうろしている怪しげな日本人がいたら誰だって不審に思うだろう。何があったのか聞かれたが詳細に説明できる英語力などなく、とにかく私達はトイレトーパーがないということだけを連呼した。ガードマンは不思議そうな顔していたが合点がいったのか、大学内の施設の鍵を開けてトイレまで案内してくれた。あの時ほど恥ずかしかったことはない。今となっては笑い話だが、その時は死活問題だった。

私は寮生活の経験があったため共同生活はそこまで辛くなかった。最初の内はアメリカと日本の文化や習慣の違いに慣れず色々と考えなければならなかったが、それも含めていい思い出となったと思う。



➤ 滞在したゲストハウス。



朝食の風景。

【英語について】

3週間を終えて、自分の英語力が上達したかと言われると、私はそうでもないと思う。だが英語に対する認識は大きく変わった。

やはり教科書や参考書を眺めているだけは話せるようにならない。文法や英語の基本的ルールを知っていることは確かに重要だが、実際にネイティブと話す時に私は文法を気にする余裕など一切なかった。恐らくそういう細かい部分は英会話に慣れてから初めて見直す部分なのだと思う。

結局、文法や発音がめちゃくちゃでもいいから話すことが英会話上達の近道なのだと感じた。ネイティブの人たちが話す内容を一字一句聞き取る必要はない。例えば Horse や Medicine という単語が出てきたら馬の治療の話をしているんだな、という程度でも十分だと私は思う。聞き取れた日の方が少ないし、説明を受けてもさっぱり分からないまま実習に参加してこの作業のことを言っていたんだな、と理解する場面がほとんどだった。

向こうの先生や学生は私達に話しかけ、質問をしてくれる。気を遣って優しくゆっくり話してくれる人もいるが、ほとんど流暢で速いので分からない。しかし一番いけないのは分からないからといって無言のままにいることだ。私も何を聞かれてるのか分からずに黙ってしまったこともあるが、それでは英語力の向上にはならない。完璧な文など作らなくても単語だけでも通じる場合もあるし、ボディランゲージで会話が繋がった時もある。聞かれたことに対して自分の頭の中で回答を作りそれを英語として発する時、一番英語の勉強をしているのだと思う。勿論自分の得意分野や知っている内容を聞いた時はより聞き取りやすくなるだろう。その点で私は今まで授業で学んだ動物や薬、治療の知識などが大いに役立った。

英語が苦手だからという理由で留学を迷っているのなら、寧ろ行くべきである。日本に生まれて育ったのだから英語が完璧に話せる筈がない。それより自分は日本語と英語、両方の言語を話せるのだという前向きな気持ちを持つことが大事だ。

私はこの短期留学でそのことに気付き、これから先の英語の勉強を見直すつもりである。

【謝辞】

今回の短期留学のプログラムに携わり、私達を支え、お世話してくださったフィンドレー大学、酪農学園大学両大学の先生方、国際交流課の方々、学生の皆さんに心から感謝申し上げます。